



作業療法の一環としてドライビングシミュレーターを用いた自動車運転評価を実施。健康体を維持するには活動範囲を広める移動支援も重要である。



(上)運動麻痺の機能回復訓練で用いるBMI(ブレイン・マシン・インターフェース)は、手を動かすための脳の正しい使い方をトレーニングするもの。(下)運動麻痺となった手足の機能を補助したり、欠損した四肢を補う目的でつける装具は、医師、理学療法士、作業療法士、看護師、義肢装具士などがチームとなって検討する。



歩行能力の改善・向上を目的とする歩行リハビリテーション支援ロボットは、2機種を導入している。

Rehabilitation

趣味はスポーツ全般。中学時代はテニスの徳島県大会で優勝しました。今は、息子が所属している野球チームの試合観戦や息子と一緒に練習をするのが楽しみです。時間のある週末には長時間ウォーキングをすることもあります。



平岡 崇 教授
Hiraoka Takashi

■ 専門医
日本リハビリテーション医学会
リハビリテーション科専門医

医療最前線

»»vol.104

川崎医科大学附属病院
リハビリテーション科

Report!

包括的なリハビリテーション医療で、あらゆる「活動」を支える。

人の活動の阻害因子であるすべての障害が治療対象

川崎医科大学附属病院のリハビリテーション科では、平岡崇教授を筆頭とする14人の医師が日々の診療にあたり、外来患者のほか、同院の全入院患者の約60%にリハビリテーション医療を提供している。「リハビリテーション」と聞くと、足にギブスを巻いた患者さんの歩行訓練というイメージが強いと思いますが、もちろんそれも適応範囲ですが、食べる、話す、歩く、運動する、排泄するなど、人の「活動」を邪魔するすべての「障害」がリハビリテーション科の治療対象です」と平岡教授。たとえば、脳血管障害後や整形外科術後に生じる運動障害、認知機能の障害である高次脳機能障害、小児の発達障害、嚥下障害、心疾患や呼吸器疾患などによる内部障害、発声障害、構音障害…。「障害」とその原因となる疾患は多岐にわたる。頭の先から足の先まで、目や心臓など特定の臓器にターゲットを絞らず、患者が「活動」できない理由を整理して問題点を洗い出し、阻害因子となっている障害の治療を行うことで再び活動につながっている。ゆえに、「幅広い全身の医学的知識と障害に対する治療知識を基にした全身管理ができなければわれわれの医療は成り立ちません」。リハビリテーション医療とは、人が健康に生きていくうえで欠かせないあらゆる「活動」を支える、包括的な医療なのだ。

そんな全人的医療を目指す平岡教授が常に心に留めているのは、川崎医科大学開学の祖である川崎祐宣氏の提唱された医療福祉の理念や、「医療は患者のためにある」という言葉。「その教えは、いかに生きるかを大切に、患者さんの生活背景にまで目を向けて取り組む必要のあるリハビリテーション医療と重なるものだと思います」。そう話す平岡教授が専門領域とする高次脳機能障害においては、かつて国が実施したモデル事業時代から参画し、現在岡山県が行う「高次脳機能障害及びその関連障害に対する支援普及事業」では拠点病院としての役割を担っている。また、国が定める厳格な施設基準を満たし、全国でわずか3つの大病院にしか認められていない「特定機能病院リハビリテーション科」の認定も受けている。さらに、脳と機械を接続し、運動麻痺患者の運動機能の改善を目指すBMIやリハビリテーションロボットなど、先進的医療機器を用いた医療の提供も行っている。「大学で教壇に立つときは、リハビリテーション医療の重要性を理解してもらい、将来この道を志す学生が増えることを期待しながら授業を行っています」と、力強く語ってくれた。

お問合せ
川崎医科大学附属病院
倉敷市松島5-7
☎086462-1111
<https://h.kawasaki-m.ac.jp>